不信人間耳尽聾
（信ぜず 人間の耳 尽(ことごと)く聾(ろう)なるを）

李　建　華

4 月に新学期が始まる日本へ、北京から大阪に飛びその翌日にスピードが驚くほど速く乗り心地がよい新幹線に乗って広島に着いた。その日すぐ花見に呼ばれた縮景園に桜が満開の風景は脳裏に焼きつく。それが 31 年も経ってしまったのかと思うと感無量である。その感激を去る 6 月に久しぶりにお会いした磯貝英夫先生に懐かしく語ると、「近代文学試論」50 号に執筆したらと誘われたのが拙稿である。お言葉に甘えて広大留学の経験を生かして帰国後、取り組んだ翻訳活動に絞って思いつくまま書かせてもらうと了解を得られたとはいえ、文学研究誌にはこんな形になってしまうのはやはり申し訳ない思いである。ご寛恕を請う。

（一）広島大学留学

振り返って見れば、僕はいままでの人生では日本と切っても切れない関係にあり、今後も否応なくそれが続くだろう。長春外国語学校の一期生として入学、寄宿生活を送りながら日本語の勉強をはじめたのは、1963 年小学校 3 年生の時だった。外国語学校は周恩来総理の指示により中国全土で七箇所作られたが、それは、旧ソ連との関係悪化が兆す一方、アメリカなど西側国家の中国包囲網を打破し、社会主義国家以外の国々との関係打開を見越しての、外交人材育成のための学校であった。それぞれ数ヶ国語ずつ語学が割り当てられたなか、長春にできた外国語学校はスタートの時点で日本語科しかなかった。残念なことに、1966 年 8 月から文化大革命が始まって社会秩序が乱れ、学校も無政府状態に陥った。1970 年から学校が復帰したが、授業らしい授業がなかった。1972 年 5 月に北京第二外国語学院に選抜され日本語の勉強を再スタートしてまもなく、中日国交正常化が実現した。ようやく日本語を活用できる場があることは、僕にとって望外の喜びだった。3 年後卒業してすぐ中央政府部門に入って対日本関係の仕事についた。

中国の文化大革命に終止符が打たれ改革開放が国策となって近代化のテンポが速くなると、先進国への留学生派遣制度がスタートした。その機縁で 1981 年日本国費留学生試験に合格して広島大学に入った。当時は理工系一色だった 10 人いた中国人留学生に、11 人目文科系第一号の僕が加わった。広島には知人もいなければ土地にも不案内だったが、留学が終わる 1983 年 4 月までの 2 年間、県知事を始め一般市民まで多くの日本の友人に恵まれ、大変お世話になった。広大の留学生活は僕の人生で貴重な経験

となった。

文学部の古びた木造教室に磯貝先生の講義を聴き、特に抑揚の効いたリズミカルな朗読を聴くことは最大の楽しみだった。院生の演習で川端康成、武田麟太郎、太宰治など順番に研究発表する風景はいまも記憶に刻まれ、自分が担当した時覚えた緊張感が容易に消えなかった。留学2年目にニュージーランドからキャサリンさん、中国大連から汪正志さんが加わって3人になった留学生のために、忙しい文学部長職の傍ら、磯貝先生は「日本近代文学史」の特別講義を設けてくださったことで、文学の輪郭は見当がつき、後日の翻訳に大いに役立った。折角の日本滞在だから、社会勉強は文学と日本を知るうえで大変重要だというご助言も、以後のさまざまな場面でその有難さが身にしみた。研究が素晴らしい人格者磯貝先生との出会いは僕の人生の誇りであり、生涯大切にする精神的富となった。しかし思えば、往時近代文学の研究基礎が皆無だった僕は、受け入れてくださった先生にどれほど迷惑をおかけしたか、冷や汗をかくばかりである。

（二）翻訳と使命

留学中の 1982 年6月に、「侵略」を「進出」に変える「教科書問題」が起きた。中日国交正常化十周年の節目にどうしてこんなことが起きたのか、理解に苦しんだ。一衣帯水の隣国であり、学びあい行き来する歴史が二千年以上続いた両国である。ここ数年、中国史学界と知識界では徐福東渡の研究がブームになり、中日文化交流史をさらに紀元前 200 年までも遡らせ、ましてや遣唐使や鑑真和上の話が中日文化交流の史実を不動のものにした。「日本晁卿辞帝都、征帆一片遶蓬壺、明月不帰沈碧海、白雲愁色満蒼梧」（日本の晁卿　帝都を辞し、征帆一片　蓬壺を遶る、明月帰らず　碧海に沈み、白雲愁色蒼梧に満つ）という李白の詩は、阿倍仲麻呂との真摯な友情を語るもので、胸が打たれる。が、その交流は近代に入って重苦しくなった。明治維新によってアジア最初の西洋的近代国家へ変貌する日本は富国強兵を推進し、列強と化し帝国主義的な領土拡張に走った。中日甲午戦争（日清戦争）とその後の中日戦争が両国関係に暗い影を投げかけ、侵略を受けた側の中国人は非常に苦痛な情感を抱いている現実があることは否めない。僕は毎日新聞に投稿し、8月 17 日付けで掲載された。日本軍の侵略によって多大な災難と犠牲を蒙り、特にあの戦争を経験した中国人民は日本との国交正常化に対してはどれほど抵抗があったか。にもかかわらず、中国政府は中日友好という大所高所から、それは一握りの軍国主義者が起こした侵略戦争であって、中国人民だけでなく、日本人民にも大きな災いをもたらしたのだと教え、さとした。それは説得に近い教育だった。このような説得はあの戦争で親類や同志、友人を失った年配の人たちにとってどれほど受け入れがたいものであったことか。それでも彼らは心の苦痛を口に出さず、心の奥にしまいこんで、笑顔で中日国交正常化を迎えたと、拙文に書いた。投稿に対して見ず知らずの日本の方から手紙をもらい、中には主婦も何人かいた。「私たち日本人は過去の悪行を教科書問題で突きつけられ苦しい思いを味わってきましたが、でもこの2カ月間ほど日本人と戦争について深く考えられたこともなかったようです」、「日本が過去の戦争を美化すれば中国をはじめ東南アジアの人々が深く傷つくであろうことは誰でも知っています。何故その人々を思いやる気持ちがないのか少しでも戦争責任を痛感

しているのであれば「侵略」を「進出」に替えるなんて出来ないことだと思います」とか、「日本人が二度と再び戦争への道を逆戻りすることを望んでいないことをお分かりいただきたい」、「日本にも中国の人々に対して過去のことに対して心から謝りたいとひたすら思っている人々が少なくないということを、どうかご帰国なさったらこんな気持ちの日本人がいるということをお伝えください」などという、ごく普通の国民からの訴えに心が打たれた。

この教科書問題が、私にとっては文学研究という「陽春白雪＝スペシャリストのような」の道よりも、今後翻訳という「下里巴人＝いわゆるジェネラリスト」の仕事を通じて一般読者に日本を知ってもらうことを覚悟させるきっかけになった。不再戦は中日両国民が願うこと、平和が末永く続くには信頼しあうことが必須である。そのためには相互理解の基礎を作らなければならないが、僕にとって一番現実的、効果ある道は翻訳だと思った。文学はもとより、政治・経済・文化・芸術など幅広い分野の翻訳活動を通じて両国民が互いに好感を持ち信頼感を強めることが僕の使命だ、と考えた。後年東京大学に留学して帰国した家内の楊晶も同じ考えを持った。

（三）『氷点』の翻訳　最初の挑戦

そんな考えを持ち始めながら、1983 年 4 月に広島大学の留学生活を終えて帰国した僕は、日本の政党政治関係の仕事の傍ら、翻訳にとりかかったが、最初の挑戦は三浦綾子の『氷点』だった。『氷点』が与えてくれた感動はいまも忘れられない。自己中心に生きる人間社会の醜さと寂しさの混沌のなか、いつも愛の心を持ち、善意の目で健康的に世の中と付き合い、粘り強く物事に立ち向かう主人公陽子が自分の血の中を流れる「罪」に気づき、それをゆるしてほしいと最後の行動を取る、その物語に共鳴した。この感動を中国の読者にも伝えたいと願って出版の目処も全くないまま、1983 年から楊晶と本格的に翻訳に取り組んだ。なにより文学作品を翻訳する経験がない、中国語に直す場合の表現はどうすれば原作の微妙なニュアンスを置き換えられるかなど、最も基本的なところから夢中になって模索した。徹夜がよくあった。悪戦苦闘の末、1987 年に外国文学出版社より中国語版が刊行された。当時東京の中国大使館に勤務していた僕がそれを知って大いに喜んだ。その喜びを分ち合うつもりで本を磯貝英夫、小田切秀雄、佐々木基一、奥野健男、小田切進諸先生に進呈した。後日談だが、1994 年頃だったか、小田切秀雄先生と会った時、貴方たちが当時どうして三浦綾子さんの『氷点』を翻訳したか不思議に思ったが、いまはそれを読んで分かった。間違いがなく、評価すべき素晴らしい作品です。この翻訳は先見の明があった、と言われて嬉しかった。三浦綾子さんは数多くの素晴らしい作品を残されただけでなく、また日本が過去に起こした侵略戦争に対して徹底的に批判する良識ある作家であった。1988 年 3 月に雪深い旭川を訪ねた楊晶が、日本人として貴国の人々に犯した罪はいくらお詫びをしても埋めることができない、許しがたい日本人の私はとても中国に行けないと三浦綾子さんに言われたことを伺った時、感動して言葉にならなかった。1999 年 10 月に三浦綾子さんが亡くなられたと訃報に接し悲しかった。3 ヵ月後の 2000 年正月に旭川へ、大雪の中を林の中にある三浦綾子文学記念館を訪ね、ショーウィンドーに私たちが翻訳した『氷点』が、静かに並んでいるのを見て、

目頭が熱くなった。

初版として二万部ほど出た『氷点』は人気を呼んだ。まもなく売りきれになり、いまや絶版。その20年後の2007年にインターネットで偶然見つかったコメントにこんなことが書かれた。「大学時代に図書館から借りた『氷点』を読んですっかり震撼された。蔵書のつもりであっちこっち探したが、残念、どうしても見つからなかった。この間本屋の新刊予告で『氷点』を見つけたのでなにがなんでもほしいと注文したが、手に入れたものはむかし読んだのと違って台湾訳、しらけた。登場人物の名前など中国人風に、辻口陽子を頼陽子に、辻口啓造を頼啓造に、辻口夏枝を夏芝に、村井靖夫を林靖夫などに変えられただけでも抵抗があった。やはり 20 年前に読んだ『氷点』がよかった」。「当時その本が手に入らないから、全部コピーしたいほどほしかった」と。読者の中でこんなことまであるとは思いもよらなかった。私たちにとって『氷点』は最初に中国語訳した日本文学作品であり、また翻訳のデビュー作だっただけに、翻訳に自信と勇気を与えられた。中国の読者が翻訳作品を通じて間接的に日本の良心に触れ、日本理解が深められることは最大の喜びであった。

（四）最愛の『パイプのけむり』（『煙斗随筆』）

『氷点』を皮切りに翻訳をいろいろ手がけた。文学（小説、随筆、ドキュメンタリー）、芸術関係のほか、政治あり経済あり宗教あり。時が矢の如く、1987 年から今日まで 25 年間にほぼ 30 冊（添付ご参照）に上り、楊晶との共訳は大半を占めている。翻訳本は、自分から進んで選んだり、出版社からの依頼だったり、はたまた友人の紹介を介したりしたものだが、いずれも日本理解にプラスになる内容、読者に示唆を与えることが念頭にあった。それらの本には、それぞれの物語があり、苦労もあり、そして数多くの感動があった。その感動が私たちに翻訳の道を迷わずに進み続けさせるものだった。

中でも團伊玖磨先生の『パイプのけむり』は最愛だった。そして文化学者余秋雨先生に「素晴らしいエッセイ、素晴らしい翻訳」と評価され、大変光栄に思う訳書でもある。

私たちが『パイプのけむり』の翻訳を通じて團先生への理解が深められた。團先生は深い中国コンプレックスを持っており、1966 年以後 67 回を数えるほど中国を訪問し、そんな中で楊晶も僕も同じ 1979 年に團伊玖磨先生と知り合った。僕はその年末に通訳として曾侯乙墓から出土した編鐘を観るために駆けつけた團先生に付き添い、楊晶はその春に團先生が自作のオペラ『夕鶴』を携え訪中公演した全行程に通訳として 1 カ月間同行した。北京・天津・上海で文革後初めての公演は飛来した夕鶴の如く、中国の観衆をすっかり魅了し、音楽家として團伊玖磨の名前が中国で広く知られた。

しかし、日本でよく知られたその随筆『パイプのけむり』を、知る者は少ない。日本に留学していた時に楊晶が團先生からサイン入りで『パイプのけむり』を三冊贈られ、その傑出した文才、ユーモアたっぷりの筆致、深い学識に感動し、中国語に翻訳できたら、という思いが脳裏をよぎったというが、本格的に『パイプのけむり』を中国語版にする切っ掛けは 2000 年の早春に一家あげて日本を訪問した時だった。東京で團先生ご夫妻のお招きに応じて銀座の「鳳鳴春」でご馳走になり、食卓で『パイプのけむり』を中国の読者に紹介したい旨申し上げたら、即座に快諾いただき、『パイプのけむり』

既刊 26 巻はそっくりトランクに納めて北京に運ばれた。しかし、その年の 8 月下旬に訪中された團先生と北京飯店で打ち合わせたが、この対面は永別となったことは思いもよらなかった。いまでも最後の情景が目に浮かぶ。「團先生はパイプをくゆらせながら、鉛筆で一冊一冊としるしをつけ、ページを繰っているうちに、思いがはるか彼方の時空に羽ばたいたのだろうか、なにやら独り言を言ったかと思うと、可笑しくて笑いをかみ殺したり、黙りこんでしまったりした。第 15 巻まで進んだ時、疲れが出たようで急に咳きこんだ。またの機会にいたしましょう、と慌てて帰り支度にかかった。先生は頷きながら、なにか考えにふけったような顔で、そちらでよいと思ったものに決めなさい、と意味深げに言われた。思いもかけないことに、このときの対面は永別となった。2001 年 5 月 17 日、蘇州で急逝された報を受けたわたしは、あまりに突然なことで悲嘆にくれた。」（楊晶『宇宙を飛翔する小惑星―『パイプのけむり』の翻訳を終えて』/「人民中国」2005 年 6 月号）

翻訳作業は團先生が 36 年も書き続けた『パイプのけむり』全 27 巻に及ぶ原文を読むことから 100 編選んで翻訳を終えるまで、4 年余りかかった。仕事の合間を縫って翻訳を続けていたこと、随筆が森羅万象にわたったため、大量の資料を調べなければならなかったことにより、これだけ日時のかかってしまったのはやむを得なかった。『パイプのけむり』を翻訳することによって、團先生の人格の偉大さがいっそう分かった。業績が優れた人物の著書の翻訳をつとめると、知らないうちにその偉大なる人格の中に没入する、そんな幸せを感じることがある。本書のために書かれた余秋雨の序文の、團先生との対面から「20 年の歳月が流れたのちにおいて、ようやく『パイプのけむり』を読むことができたこと、それも先生が亡くなって数年も経ってからのことになろうとは、まったく予期しなかった」というくだりを読むと、翻訳者として微かに心の疼きを感じないわけにはいかなかった。世の中で、素晴らしい作品なのに翻訳がなされないために、埋もれたまま国境を跨いだ交流ができないものは、ごまんとあるだろう。拙文を書いているところへ、今年のノーベル文学賞をスウェーデン・アカデミーが「幻覚を伴ったリアリズムによって、民話、歴史、現代を融合させた」という理由で中国作家莫言(モーイエン)さんに授与したニュースが飛び込んできた。これで中国人が文学に対する態度を変えると同時に、外国人も中国文学に対する目が変わり、中国文学の全体的向上に資するだろうが、莫言さんが受賞一番に翻訳者の努力がなければ受賞できないと素直に感謝の言葉を述べた。日本にも『豊乳肥臀』、『蛙鳴』、『赤い高粱』、『白檀の刑』、『四十一砲』など氏の作品が数多く本屋に並んでいるが、これも、翻訳者の功である。こういう意味では、長年来私たちがつとめた翻訳活動の意義のあること、その重要性がさらに自覚させられた。

團先生逝去四周忌にあたる 2005 年 5 月 17 日午前 10 時から始まる出版記念会会場に、刷り立ての中国語版『煙斗随筆』が 9 時頃になって印刷製本工場から搬入された。それを手にすると、熱い涙がどうしても抑えきれなかった。印刷が凝って紙も上質。天地は広く白黒写真の印刷も文句なし。作者がパイプを銜える横顔が表紙に浮き上がった。團先生がご健在であればどんなに喜んでくれるだろうと、悔しくて堪らなかった。出版記念会に日本から来られた多くの方々、また中国側はご生前の親友たちや團先生

を敬愛する大勢の方々から好評を博したことを、天国にいらっしゃる團先生に良い報告が出来たことをかみ締めた。

優れた散文家と言っても言い過ぎではない團先生。その人柄を偲ばせるかのように、細やかな、率直で、ややユーモラスな筆致といい、さらっと描く手法を用いた静謐な語りといい、ときに感情的混ざりけのない叙述は理知に富む清潔感があり、センテンスごとに美しいものが溢れている。この美は文字そのものと、それに伴う知が生んだ独特な想像力から来ている。大きくは歴史、民族、文化、人生から、小さくはハンドバック、万年筆、色盲、義歯、大蒜、寿司、お辞儀など日常見慣れた物事や市井でよく目につく現象までありとあらゆるジャンルが話の対象になる。デイテールにこだわる描写が機知に富み、何より社会の無秩序を前にして常に平常心を保ち、カオスの中を物事の表象から本質を見抜く慧眼が感じられた。どんどん便利になり、リズムは加速する世の中を、「忙しくなって、殆んどの人が、便利という事柄をさも良い事のように錯覚するようになってしまった事を誤りだと思っている。成る程、事柄が良いという事は便利な事である。然し、だからと言って、便利な事は事柄が良い事をかならずしも意味はしない」（『面倒』1972）と言い、またテレビメデイアが氾濫する現象を、「真面目そうな姿をした、或いは真面目な意図を持った番組でも、それが番組である以上、学問的な論文ではない。……画面に流れる事象は、既に画面に流れている事で、全部嘘であり、虚の世界の幻であると思っている。」（『やらせ騒動』1993）と、辛辣に矛先を向けた。團先生が小さな事柄から大きな事を見出す。例えば、割箸という在り来たりで取り立てて珍しくないものに対して、「割箸を使う日本の風習を一刻も早く止めるべき悪習」、少なくとも自分の箸を持つよう主張している。さらに「この悪習を捨てぬために今ではアジア中、殊に輸入を仰いでいるフィリピンの森林が厖大に伐り倒されてその量は、年間五万軒の南アジアの人達の簡単な住宅が建つ量に達しているという。･･･割箸は只一時の使用が終われれば捨てられるだけである。日本人が地球を滅ぼして行く事は防がねばならない。成る程、この頃は国内では自然保護の思想も市民権を得てきた。然し、世界的視野からこれを眺めれば、日本人は日本国内の自然保護だけを考える一国規模の地域エゴイストとしてしか受け取られない。」（『割り箸』1989）と手厳しい。広大に留学した当時、便利で衛生的という割箸に大変感心したことがあるが、日本からいつの間にか導入した中国ではいまや各地のレストランで氾濫している現実を見るに付け、森林破壊は恐ろしい規模になっているだろうと恐惧する。

團先生の藝術への追求と信仰は人間への愛を政治や国境を超えさせるものだ。1977 年にマレーシア旅客機が墜落して日本のメディアは日本人乗客の安否にだけ気遣う報道に対して、「世界中の人間は誰でも家族を持ち、仕事を持ち、友人を持ち、過去を持ち、現在を持ち、未来を持っている。一人一人の人間は、国籍と関係なく、重い」（『今朝考えたこと』1977）と書かれた。学校の苛め問題を「本来人間は弱い者に対して惨虐なものである。これは群棲動物として発達してきた人間の、避ける事は難しい本性だと思う。･･･従って、群れて暮らす動物の宿命的本性なのだ」とずばり、そのうえ「多くの人の意見は、今の子供は、今の父親、母親は、今の教師は、といった「今」を問題としているもののみが多く、もっと本質的な、人間本来の惨忍性と、

その惨忍性を正直に受け継いでいる子供本来の嗜虐性をどう抑制するかの点を説く人は居ないのが不思議」「大人達は流血淋漓の時代劇を楽しみ、ベッド・シーンに興奮し、下司な報道や犯罪記事を熱読しながら、子供の苛めや暴力を、今の子供は、などと心配している図程奇怪な事は無い、そんな大人達に、子供を心配したりする資格は無い。僕は、非行に走り、暴力的となり、苛め、苛められを露呈する子供を心配する前に、日本の大人達を心配したい」と指摘し、さらに、「日本の場合、僕達が深く内省せねばならぬ事は人間本来の惨虐性に加えて、日本人独特の惨虐性が加わっている事だろう。無論誰も彼も惨虐的だと言うのでは無い。然し、何かの気運、趨勢で怖る可き惨虐性を発揮する民族で日本人があるという事は、歴史が僕達に教える事である。何処の国にもそうした歴史があると言ってしまえばそれ迄だが、八道処女無しと言われた文禄・慶長年間の秀吉の朝鮮侵略の際の日本軍の目を覆いたくなる惨虐行為や、1930 年代からの中国侵略の際の日本軍の惨虐行為と異常な迄の日本人の暴力的思いあがりは、永久に東アジアの歴史から消す事が出来ない汚点、恐怖、痛恨事となって残っている事を日本人は知らないと不可ないと思う」（以上は『「苛め」について』1985）と悲しい歴史を包み隠すことなく、想起することで日本人自らを戒める。痛烈な批判の裏には、その年 8 月 15 日に中曽根総理が閣僚を引率して行った戦後初めての公式参拝が二重写しになった。

終篇の『さようなら』は最も心が打たれる文だった。1964 年 6 月 5 日から 2000 年 10 月 13 日まで、1842 回の連載を休みなく執筆する「場所はさまざまだったにしろ、『パイプのけむり』は僕にとって至福の時を与えて呉れたとともに、当然、思索と内省の機会を与えて呉れた。有り難い事だと思っている。･･･第一回の原稿を届けに行った時、僕は四十歳になったばかりだった。そして、今、この稿を終える時、僕は七十六歳を越える」。36 年間のタイムスパンにはやはり驚愕せざるを得なかった。文の最後、いや、27 巻の『パイプのけむり』の最後に、流れるような語りで結んだ。

「今年もいよいよ秋らしい秋がきた。秋は、折り敷く落ち葉の中で物事を終えるのに似合った季節である。長年、この稿に親しんで下さった方々にお別れの挨拶をせねばならぬ時が来た。

さようなら。

僕はもう此処には帰って来ない。老人は消えていく。見えるのはだんだん小さくなって行く背中だけだ。老人は古い古い今様の旋律を口ずさんで歩いて行く。

大寺の　香のけむりはほそくとも　空にのぼりてあまぐもとなる――。

老人のパイプからはもう「けむり」は出ない。目指しているのは、求めているのは、今はもう異る種類の「けむり」のようである。」

最も人を感動させる結びだった。数ヵ月後、こよなく愛した中国の蘇州で逝くなられた。

余談だが、上記「大寺の香のけむりはほそくとも空にのぼりてあまぐもとなる」を翻訳する時、練りに練ったあげく、「大寺香裊裊　昇空化雨雲」と中国語に訳した。この訳を余秋雨先生が大変気に入って序文にも引用し、また多くの評者に書評でも評価された。デザイナー呂敬人氏がわざわざこれを『煙斗随筆』の前袖に入れている。ところが、昨年團紀彦さんから、この歌は李白の『陽叛児』にあった「博山炉中沈香火、双煙

一気凌紫霞」（三好達治の訳「博(はく)山(ざん)炉(ろ)の中なる沈香の火、双煙(そうえん)一気(いっき)紫霞(しか)を凌(しの)がん」）に由来するのを見つけ、証拠のページをコピーで送ってきたとき、さすがに吃驚仰天。でも、ここに李白の詩に戻しては、やはり不自然な感じになるのは、風土の違いだろうか。

『パイプのけむり』中国語初版の三千部は早くも売り切れたが、好評は絶えない。そして2007年に「中国の最も美しい本」に選ばれた。2011年團伊玖磨先生逝去十周年を機に、新星出版社が『パイプのけむり』を世界優秀散文シリーズの一冊に取り上げ刊行した。初版100篇のうち40篇を割愛せざるをえない縮刷版になったが、かわりに『ステーション・コンサート』、『今昔の島』、『帰還』という三編を新訳として加えた。「『煙斗随筆』を読めば、その入念の描写、上品で豊かな感受性が音符のように躍っており、恰も春の長閑さを感じるコンサートを楽しんでいるように五感が全開し、視覚、聴覚、しゅう覚、触覚が一々敏感になってくる」など、すっかり魅了された読者がインタネットに書き込んでいる。

中日国交正常化四十周年を迎えているのに、両国関係がかつてなく危機に直面させられたこの時、團先生を非常に懐かしく思う。團伊玖磨先生のような良心・良識ある方々のおかげで、世界における日本のイメージが作り直されただろう。

（五）『約束の夏』（『夏天的諾言』）の意義

若松みき江の『約束の夏』に出会ったのは2005年12月、北海道大学の高井潔司教授から薦められたのがきっかけ。戦禍の満州（中国東北部）から命からがらに引き揚げる一家五人の逃避行を八歳の少女の目で描いた自伝的長編小説、衰弱した一歳の弟を中国人夫妻に託した母は「決して捜しにこない」という約束を戦後60年も一家は守り続けたというストーリー。翻訳に取り掛かり、引揚60周年の翌2006年12月、中国語版『夏天的諾言』は当代世界出版社の協力を得て出版できた。作者の若松さんを含め日本の関係者が北海道から北京に飛来し、中日友好協会主催による出版記念会で中日不再戦を改めて誓いあった。

いかなる性格の戦争も、その結果は無辜の平民の犠牲を以って終了するものだ。戦争を経験した人たちの平和に対する渇望は切実である。その意味から、『約束の夏』がわれわれに貴重な間接体験を与え、封じられた記憶の中から歴史を読み解くヒントが得られた。終戦67年を迎えて戦争知らずの世代が人口の大多数を占めるようになり、戦争の記憶が風化しつつある。戦争経験者を含める人たちの感情記憶は歴史学人らが「歴史の客観性」の学理に対して見事な接木をしている今日では、この八歳の少女が淡々と語る歴史記憶が間違いなく貴重な記録であり、告発の書であり、これこそ中日共有の歴史である。

侵略戦争は中国人民に残酷非道な災難をもたらしただけでなく、日本国民をも苦難に満ちた深淵に陥れた。日本の「棄民」政策が数千人に及ぶ残留孤児という特殊な一群を作り上げたことは、作品からも十分な裏づけが得られる。「年の始めの紅白おじや」、「春節」、「落花生とぎょうざと」などの章に書かれた中国人との人間的真情の暖かさを感じ取った。日本の引揚難民が苦境に立たされた時に、中国人民が徳を持って怨みに報いる、博大な胸襟で敵国の難民に助け

の手を差し延べた。戦争の傷跡が生々しく、共産党と国民党が東北を争奪するための軍事摩擦が絶えない中にもかかわらず、人道的立場から百万を越えた日本難民を引揚げさせた。これは世界史上稀に見ることである。日本がもし近代優劣史観で戦争責任問題に対応すれば、中国及びアジア諸国から信頼されないだけだろう。幸いなことに、日本国民の中に、中日戦争について若松さん親子のような立場に立って戦争を反省するような人が少なくないことに心が慰められる。

『約束の夏』の出版は、中国で特に青少年の中で反響が強かった。過日杭州で行われた読書作文コンクールに高校生と中学生がそれぞれ『約束の夏』をテーマに綴った読書感想文が一等賞と二等賞を獲得と報道された。「1945 年に咲いた向日葵が人類の平和への憧れを表すもので、永遠に咲き誇るよう心から願う」と作文の結びにあったように、中国と日本は永遠に不戦を誓う隣人でなければならない。二度と戦争が起こらないよう、お互いに努力してゆかねばならないという平和の大切さを認識する若者が増えることは何よりありがたいことではなかろうか。

読者の一人がインターネットのコメントで感想を述べている。「『夏天的诺言』を読み終えた。感動の至りです！この本を皆さんに薦めたい。この本は、日本が中国を侵略した時期に、「満州」で発生した日本の一般国民の悲惨な物語である。読めば、私たちと同じように日本人民も被害者であり、日本帝国が起こした戦争の犠牲者だとよく分かる。しかし、日本には平和を渇望し、戦争に反対する人は多くいるのに、なぜ日本政府は教科書を改ざんしたり、要人たちが繰り返して靖国神社を参拝するのか、理解に苦しい」と。

その通りである。日本国内では日本が起こした侵略戦争の性質の認識を今だ誤魔化し、つい最近自民党の安倍晋三総裁をはじめ、超党派議員 67 人も秋季例大祭を機に東条英機など A 級戦犯を祭る靖国神社を堂々と参拝した。罪意識と恥を少しも見せず、アジア人民の感情に気がねするそぶりもない行動を見ては、アジアと中国人民の寛恕をどうして得られるだろうか懸念する。教科書問題、靖国神社参拝、慰安婦問題、南京大虐殺でっち上げ論および当面の島争いなど、今日の日本が中国と周辺諸国間におけるさまざまな外交摩擦はすべて、日本国、国民が第二次世界大戦に対して賢明に始末を付けなかったまま経済大国に陶酔してしまったツケであろう。作家の大江健三郎氏をはじめ、多くの有識者や市民団体が立ち上がって日本の誤った立場を厳しく批判するが、終戦がいまや 67 年が過ぎ去ったにもかかわらず、日本は徹底的に清算しなかったこの歴史を、中国やアジアの人々が忘れる事はできるだろうか。こういう意味でも、『約束の夏』の存在が大きい。

残念なことに 2010 年の秋、若松みき江さんが亡くなられた。

（六）大地に樹を植え、人の心に樹を植える

『ぼくらの村にアンズが実った』（『雁棲塞北』）

人類の生存を脅かす環境問題への関心は、翻訳活動につながった。2005 年 4 月に高見邦雄さんの『ぼくらの村にアンズが実った』の中国語版『雁棲塞北』が出版された。

23 年前の 1989 年に僕は『山坳上的中国』（日本語版『中国・未来への選択』）を読んで、中国の環境問題の厳しさに驚いた。作者は中山大学の副教授何博伝氏だが、その独特な観察眼と優

れた鋭い分析と直言して憚らない勇気には脱帽させられた。その話題には高見さんも大変関心があり、1992 年から実際行動を起こして NGO「緑の地球ネットワーク」（GEN）事務局長として中国の黄土高原における緑化協力事業に取り掛かった。今年で 20 周年を迎えた。

高見さんとは 1974 年に知り合った親友である。本書は 2000 年から配信しはじめたメールマガジン「黄土高原だより」をもとに加筆してまとめたもので、彼と GEN の人々が大同で植林のためにいかに苦節 10 年を乗り越え、現地の村民たちと無理解から相互理解へ、そして今のような密接な協力関係になったかの記録である。独自の視点でさりげなく読者に語りかける爽やかな口調の裏に、深刻な環境問題や反省させられるべき指摘が随所に伺われる。

大同は黄土高原の最東部にあり、魏晋南北朝時代に五胡十六国の中から鮮卑族拓跋部が伸張して 386 年に北魏を建国し、平城京として栄えた地である。『山西通志・林業志』にある山西省の森林被覆率の歴史的な推移をみると、秦以前は 50%、唐・宋は 40%、遼・元は 30%、清は 10%未満だが、1949 年新中国成立時はなんと 2.4%になったことに驚きを禁じえない。黄土高原の自然環境悪化の主因は明らかに人類の非合理的営為によるもの。都市化による人口集中、食糧生産のための耕地造成、レンガ焼成や金属精錬のための森林伐採、生活燃料としての柴使用、過放牧、繰り返された戦火などが、黄土高原を経済文化の中心的地位から、貧困県集中地域にまで転落させ、そして貧困ゆえに環境破壊が加速する悪循環に陥った。「文明のまえには森林があり、文明のあとには砂漠が残る」と高見さんが訴える心情は、痛いほど分かる。2000 年以降、僕は歩き続けたチベット、四川、雲南が森林乱伐により沙漠化が進む現状を見て、「最後の浄土」がいつまで持てるかと思うと、気が重くなる。自然界が数百万年以上の長期間に形成した自然環境を、人類が数百年、数十年の短時間に破壊しつくすが、一旦破壊されると、回復は途方も無い長期間が必要とされる。中国はこの 30 年来衆目を集める経済発展を遂げ、人々の物質生活は豊かになった反面、環境汚染・生態破壊と資源消費など高い代価を払わされてきた。僕はチベットなど遠隔地から北京に戻るたびに、百貨店やスパーの棚に溢れるモノを見ては、その矛盾に困惑してしまう。

大同の環境は厳しい。地元では「山は近くにあるけれど、煮炊きに使う柴はなし。十の年を重ねれば、九年は旱で一年は大水」や、「風が一年に一度吹き、春に吹き始めて冬まで吹く」、「ひと雨降れば土が逃げ、肥料が逃げ、作物が逃げる」などにあるように、黄土高原の自然環境劣悪のほどが本書からもその一端が伺える。

この厳しい環境と深刻な現実を前に、資金不足に悩み、木を植えても活着率が低く、場所によって全滅する打撃に耐えなければならなかった。しかし、彼はめげなかった。一年のうち三分の一の時間を大同で過ごし、村を歩き回ってその地の自然環境と社会・人情を理解し、農民との交流を深め、現地に合ったさまざまな緑化方策を模索してきた。誠意と実行動によって現地の幹部と村民に「老高」と親しまれるようになり、多くの日本の団体・個人の道義的、資金的、行動面の幅広い支持を受けた。1999 年に入って成果がやっと見えはじめた。20 年で造林 5500 ヘクタール、植樹 1800 万本の実績をあげた。地道な活動は内外から高く評価され、2001 年に中国政府から「友誼賞」、大同市政府の「環境緑化賞」、2003 年に朝日新聞社から「明日へ

の環境賞」など数々の表彰を受けた。特に中日関係がギクシャクする昨今、高見さんらが掲げた「大地に樹を植え、人の心に樹を植える」ことは非常に重要だ。「友好」を盛り上げるための形式的なものより、ずっとあとに茂る森こそ最高の記念碑だと、高見さんが言う。この種の民間交流は、両国民の相互理解を促進する上できわめて貴重な経験を提供してくれた。

本が出版されて以来、大きな反響があり、3刷になった。僕の知る人知らない人を問わず、読者は「読み終わって自分に恥ずかしくてたまらない」、「素朴と素直、こんなに感動させられる本が今のご時世、なかなか見あたらない」などと口を揃え、高見さんの行動に感動する。

（七）『原発禍を生きる』
（『在核電的禍水中活着』）

これはごく最近、正確に言えば 8 月 20 日に翻訳を終え、9 月上旬香港三聯書店より上梓されたのである。

日本の 3.11 大地震による津波が山を押しのけ海を覆す勢いで情け容赦なく家、車、道をすべて呑み込んだ場面が現代メディアを介して人々に与えた衝撃は間違いなく凄まじかったが、9.11 と同じように敵が見えない原発禍が社会秩序と人間のメンタル面に与えたショックは地震・津波の恐ろしさを遙かに超えている。原発の安全神話が過去となり、安逸便利への欲望と経済利益への貪欲がとうとうゼウスに報復のチャンスを与え、すでにあけたパンドラの箱が日本及び世界にもたらした深刻な影響が蔓延している。原発禍を前にして、人々は彷徨い、考え、反省または覚醒した。そんな時、友人の紹介で『原発禍を生きる』に出会った。著者はスペイン思想研究者である佐々木孝教授で、福島第一原発より 25 キロの南相馬で大地震に襲われた。認知症の夫人の介護のために屋内避難を選んで逼塞した状態におかれながら、「自分の目で見、自分の頭で考え、そして自分の心で感じ」た陸地孤島で暮らした日々を、ブログを通じて発信した。国の原発政策、行政の無為無策、社会の不正、モラル低下などを痛烈に批判しては、「克服すべきも多くの課題を抱えた人類、とりわけこれからこの因果な世界に生きていかなければならない子供たち若い世代に、負の遺産だけは残したくないという切実な願い以外の何物でもない」と真意を述べている。彼の吶喊が注目され、多くのメデイアや TV に報道されただけでなく、インターネットのクリック回数も最高の時、一日 5000 回に達した。福島原発事故の教訓を受け、建設中・計画中の原発に急遽マッタをかけた中国には、この事故現場の至近距離から伝わった声は、間違いなく参考或いは示唆になるだろうと考えて、一刻も争って翻訳に取り組んだ結果、百日間で脱稿した。著者は中国語版への序文に「…放射能は明らかに反自然のもの統御不可能なものであり、その廃棄物の安全性もいっさい保障されていないのは誰の目にも明らかだからである。廃棄物を地中深く埋めれば安全などと考える人間の頭自体が狂っているとしか思えないのだ」と言い、最後に「もう一つの放射能禍・原爆の広島投下記念日を三日後に控えて」と結んでいる。中国の読者はちゃんと自分で思考、判断するだろう。

6 月 28 日から 30 日の間に東北震災地に行った。人が住んでいる気配がない仙台の閖上と野蒜地区では、廃棄した駅やさびつくレール、破壊された家屋が白い光に反射して、不気味に静まり返っていた。その被害様子を眺めながら、復興の日はまだ遠いなぁーと感じた。そして作

者佐々木先生を訪ねるために、南相馬へも足を伸ばした。常磐線で亙理まで、そこから相馬までは代行バス、また常磐線で原町まで、という近くて遠い道のりでしたが、道々目にしたのはグリーンの延々と続く風景でした。原発禍がなければ、どんなに素晴らしい桃源郷だろう。原町に着くと、佐々木先生が親切にご自宅まで迎えてくださった。長男の淳さん、中国撫順から嫁いできた頴美さんと対面して東北出身者同士の親しみを感じた。孫の愛ちゃんが恥ずかしそうに現れたら、胸がぐっと熱くなった。福島第一原発から 25 キロしか離れない緊急時避難準備地域というレッテルのある原町だから、生活面ではいろいろ不便を乗り越えなければならないだろうが、愛ちゃんの天真爛漫な笑顔を見れば、「この因果な世界に生きていかなければならない子供たち若い世代に、負の遺産だけは残したくない」という佐々木先生の気持ちが身にしみるほど分かった。

とき恰も『原発禍を生きる』の翻訳が進んでいる時、日本政府は再稼働を正式決定し、福島第一原発事故後定期検査で停止した日本国内の原発が 7 月 1 日から関西電力大飯原発の運転再開によって「稼働原発ゼロ」は終わる。そして、『在核電的禍水中活着』が香港の店頭に並んで 1 カ月経ったころ、10 月 25 日に中国政府は原発建設を再開すると報道された。

（八）その他の翻訳

◎下村湖人『次郎物語』（『次郎的故事』）

次郎との出会いは「神鳥書店」、東千田町の広大旧校舎のすぐそばにある古本屋だった。店主神鳥泰次は酒好きの義理固い方で、長い間親しく付き合ったが、昨年亡くなられたことを知って悲しかった。『次郎物語』を翻訳する切っ掛けは、なにより児童文学によくある主人公が正義感の化身のようなパターンと違って英雄少年特有の気取りがすこしもなく、親と子の心のふれあいを新鮮に感じて、中国に紹介したい衝動に駆られた。1991 年に中国語版が中国工人出版社より出されたことが、著者のご遺族はもとより、ゆかりの地方新聞にも取り上げられ、佐賀の湖人生家や小金井市公民館も、はじめて外国語訳が出来たと喜んだ。今度は『次郎物語』が中国人民大学出版社による「楊晶・李建華訳述系列」12 巻もののうちに選んだことで、本書に反映されている愛情と理想を持ち常に努力する湖人の教育理念が、より多くの読者に生の活力をもたらすことを期待したい。

◎京極純一『日本の政治』（『日本政治』）

日本の政治を仕事とする私たちはこの本に関心を示したのは、日本人が政治の場面における感覚、思考、意識、行動を理解するのに資するだろうと考えて翻訳を思い立った。統計学を駆使するなど、日本の政治・選挙制度を分析する斬新な方法が用いられたことで、日本政治の研究者たちには参考になったが、翻訳にかけた骨身に染みた心労の方も忘れられない。息もつかぬ活字の列を前に、つらい徹夜の作業、命を削るとはこのことだとしみじみ思った。いまも中国語版の『日本政治』を手にわれながらよく翻訳できたと感激するものだ。

◎山田無文『和顔愛語』

日本の昭和を代表する禅僧山田無文老師の膨大な法話や提唱の中から厳選した 164 編。中国語版は禅文化研究所が刊行した『和顔』『愛語』姉妹書を一冊に仕上げたものだ。著者山田無文（1900-1988）は禅文化研究所の初代所長、臨

済宗妙心寺派管長で、花園大学学長をつとめ、中日両国仏教文化の交流や臨済祖庭復興の事業において多大な貢献をなされた方であり、1957年を皮切りに数度訪中し、その最後の訪中に当たる1980年6月、日中友好臨（済宗）黄（檗宗）協会第一次訪中団の団長として来られた時に、僕が通訳をつとめた。北京の広済寺、霊光寺、河北の臨済禅寺、趙州柏林禅寺、河南の嵩山少林寺、杭州の霊隠寺、上海の玉佛寺などの禅林に同行した。和顔愛語そのままの無文老師が当時まだ26歳の通訳にすばらしい印象を残してくれた。それから12年経った1992年に禅文化研究所に入ったのも、この時のご縁によるかもしれない。『和顔愛語』の翻訳は、老師に対する深い思い出を形にしたもの。

以上、紙幅の制約で終わりにしたい。●平山郁夫著『悠久の流れの中に』『玄奘三蔵・祈りの旅』を一本で出した『悠々大河』●杉浦康平著『かたち誕生』(『造型的誕生』)、『疾風迅雷—杉浦康平雑誌デザインの半世紀』(『疾風迅雷—杉浦康平雑誌设计的半個世紀』)、『アジアの本・文字・デザイン』(『亜洲的書籍・文字与設計』)●海上雅臣著『井上有一　書は万人の藝術』(『井上有一　書法是万人的藝術』)など、まだ紹介したい芸術関係の書籍群がある。本来、『パイプのけむり』以外に、これらを中心に拙稿を書きだしたが、途中で考えを改めた。また機会があれば、と思う。

タイトルは王陽明の『睡起偶成の詩』の一句をつけた。中日の良き近隣関係を期して、微力ながら翻訳を通じて努力邁進する決意のほどを示したつもりである。

（2012年10月31日）

［添付］　主な翻訳作品は下記の通り

既刊（翻訳）

- ●『氷点』(『氷点』朝日新聞社）三浦綾子著/李建華・楊晶訳/外国文学出版社/1987.6
- ●『二十一世紀的日本和世界』(『これからどうなる　日本・世界・21世紀』岩波書店）共訳　李建華「平和・核・環境」を担当/中国社会科学出版社/1987.9
- ●『次郎的故事』(『次郎物語』集英社）下村湖人著/李建華・楊晶訳/中国工人出版社/1992.11
- ●『我的経営之道』(『祈りと愛の商人道』日本教文社）和田カツ著/楊晶・李建華訳/中国発展出版社/1992.4
- ●『日本政治』(『日本の政治』東京大学出版会）京極純一著/楊晶・李建華訳/国際文化出版公司/1992.10
- ●『日本致富奥秘』(『金持ちへの早道』読売新聞社）邱永漢著/李建華訳/学林出版社/1997.1
- ●『這裏是北京情報站』(『こちら北京探題』新潮社）邱永漢著/李建華訳/財訊出版社/1996.8
- ●『中国人的思想構造』(『中国人の思想構造』中央公論社）邱永漢著/李建華・楊晶訳/財訊出版社/1998.10

●『造型的誕生』(『かたち誕生』NHK 出版）杉浦康平著/李建華・楊晶訳/中国青年出版社/1999.7
●『雁棲塞北』(『ぼくらの村にアンズが実った』日本経済新聞社）高見邦雄著/李建華・王黎傑訳/国際文化出版公司/2005.4
●『煙斗随筆』(『パイプのけむり』朝日新聞社）團伊玖磨著/楊晶・李建華訳/国際文化出版公司/2005.5
●『疾風迅雷―杉浦康平雑誌的半個世紀』(『疾風迅雷-杉浦康平雑誌デザインの半世紀』TRANSART）杉浦康平著/楊晶・李建華訳/三聯書店（北京）／2006.12
●『亜洲的書籍・文字与設計』(『アジアの本・文字・デザイン』TRANSART）杉浦康平著　/楊晶・李建華訳/三聯書店/2006.12
●『夏天的諾言』(『約束の夏』北海道新聞社）若松みき江著/李建華　呂氷訳/当代世界出版社/2006.12
●『悠々大河』(『悠久の流れの中に』三笠書房＋『玄奘三蔵・祈りの旅』NHK 出版）平山郁夫著/楊晶・李建華訳/三聯書店（北京）/2008.4
●『井上有一　書法是万人的藝術』(『井上有一　書は万人の藝術』ミネルヴァ書房）海上雅臣著/楊晶・李建華訳/河北教育出版社/2009.10
●『登山的智慧』(『山歩きの知恵』信濃毎日新聞社）田村宣紀著/楊晶・李建華訳/中国地質大学出版社/2009.11
●『和顔愛語』(『和顔愛語』禅文化研究所）山田無文著/李建華・楊晶訳/黄山書社/2010.12
●『在核電的禍水中活着』(『原発禍を生きる』論創社）佐々木孝著/楊晶・李建華訳/三聯書店（香港）/2012.9

新刊予定

●『白隠的禅画世界』（『白隠―禅画の世界』中公新書）芳澤勝弘著/楊晶・李建華訳/中国人民大学出版社/2013
●『板極道』(『板極道』中央公論社）棟方志功著/楊晶・李建華訳/中国人民大学出版社/2013

著述

●『各国首脳人物大辞典』共同執筆（日本の部）中国社会出版社　1991.11
●『世界政治学大辞典』共同執筆（日本の部）人民日報出版社　1993.3
●『現代日中常用漢字対比詞典』共同執筆　北京出版社　1996.1
●『聖域巡礼』李建華著/禅文化研究所/2004 年-2012 年『禅文化』誌に連載済み、2013 年に単行本化

（り　けんか、翻訳家）